

文学博士石川謙君の「古往来についての研究」に対する授賞審査要旨

—上世・中世における初等教科書の発達—

本書は往来と呼ばれる一群の教科書の内、特に平安後期から室町末期に至るまでの五百五十年間に編纂され使用された謂わゆる古往来について、文献学的・教育史的に研究したものである。往来は古くより我が国に発生し発達した初歩学習用の教科書であつて、初等教育発達の過程を調査する上に有益な資料である。

本書は四編から成つてゐる。第一編は序説であつて、これを二章に別け、第一章では「往来の語義」に関する諸説を検討することを主眼とし、平安時代から江戸時代末期にいたる間に現われた諸論説を吟味して、発達しつつある往来の意義を究め、初は消息文集を意味したものが、漸次初等教科書そのものを指すようになった始末を叙し、第二章「初歩教材における往来の地位」では、初等教育用の教材として、学習過程の中に占める往来の地位を述べてある。

第二編は古往来に関する基本的研究であつて、これを別けて二章・四節とする。第一章は「古往来の編纂年代とその普及」で、伝存古写本の探訪蒐集と古文獻による徴証とによつて、能う限りの古往来を検出することとめてゐる。その第一節は編纂並に普及についての個別的考察であり、第二節は総合的考察である。前者においては個々の古往来について、撰作者・編纂年代・普及状況などを考証し、後者においては総合的に編纂普及の情勢を説いてある。特に後者で流布の様式と編纂方法上の類型とを説明し、第二章は「往来内容の移動性・変異性」に関する研究であつて、長い年代に亘つて使用されている間に、だんだんその内容・その文章が変化して行つた過程を調査して、そこに

古往來の教科書としての性格の一面を捉えようとしたものである。第三節は同一往來内における内容の推移について考究し、第四節は往來相互間の内容上の關聯に關して説いてある。

第三編は古往來に關する教育史的研究であつて、三章・六節から成つてゐる。第一章の「漢字教育の内容」においては、編纂方式が互に近似しながら、然かも往來とは呼び兼ねる語彙教科書について、その源流・傍流を調査して、之を第一節とし、語彙科往來の發芽し得る地盤と雰圍氣を説き、第二節に入つて、語彙科往來出現の教育史的背景とその出現の情勢とを記述し、第三節に於て、古往來に於ける漢字教育の具体的内容を、収録語彙の質と量について論証してある。第二章の「漢學教育の内容と方法」では、中世教育の主要教科であつた漢學を、古往來が如何に考え、如何に評価してゐたかという点を課題とし、第四節では漢學科の本質とその教科書を取扱い、第五節に於て、漢學教育の方法を、學習態度の確立・教授方法論の二面から考究してある。第三章の「古往來に見える教育思想」においては、代表的な往來に見える教育思想(第六節)を考え、思想体系一般の見本を東山往來によつて例示し、教科價值論の代表を異制庭訓往來・新撰遊覺往來によつて例示してゐる。

第四編は古往來から見た家觀念の發達を主題とし、家族成員の生活生態を示すが本領であつた「家」が、だんだん發展・転化して、文化的・精神的要素を重く見るように傾いて、ついに「道統」という話に近い概念にまで移り變つて行く過程を闡明したものである。それはやがて、家訓・壁書等に依る独自の教育形態を産み出して行く地盤の調査を目標としたものである。この編を別けて二章四節とする。第一章は「家に關する成語の分布」であり、その中第一節には、家の字を含む諸種の成語、第二節には家に關する成語の分類を掲げ、第二章は「家觀念展開の過程」であつて、そ

の中を第三節家觀念展開の方式と、第四節成語の消長と家觀念展開の過程の、二段に別けて論考してある。

以上が本書の梗概である。今これを通観するに、種々の点において注目すべき業績が認められる。第一は資料の蒐集とその処理法である。著者は東京都を始め十一府県・二十七ヶ所を探訪して、百点に達する古写本を新に見出し、これを従来すでに学界に報告されていた四十七点の上に添加した。その中には著者の新しく発見した往来が七種に及び、既知の古写本よりも一層古い書写本の発見によつて、編纂年代に関する従来の通説を修正したものが八種に達した。その他群書類従所収の新札往来が大量の誤脱と大がかりな錯簡を含んでいることを指摘し、同遊學往来が後世の加筆改竄を大量に含んでいることを証明した点など、注目すべきものが少くない。

著者はこの研究資料の蒐集に當つて、極めて周到な用意を怠らず、同一往来に属する古写本であつても、一々或は写真に撮り或は複本を作つて精密な比較考究の用に供した。その結果として、一方では往来普及の度合、伝播の様式を測定し、教科書として採用せられた広さと長さ(年代)とを具体的に検出する手掛りをつかみ、進んで伝統的往来の成立過程を詳かにし、往来の代表的類型を摘出することにつとめ、他方に於てはその使用せられた時代時代の教育上の必要に應じて、絶えず自らの内容を変更しつづけて来た事實を明かにし、これに依つて往来相互の間の姉妹関係・祖孫関係をも明かにした。

研究法の精到詳密なることは特に注目に値する。古往来の中に教材として意図的に盛り込まれた語彙や事項(知識内容)を克明に分析登録して、無慮一万にあまる單語・連語を摘出し、それらが持つ教育的素質に基いて整理・分類した上で、分量と内容とを咬み合せて、教育の具体的な様相を点出して居る。第三編・第四編に取扱つた漢字教育・

漢学教育の内容や家觀念の展開方式などは、かくの如き研究方法によつて得た成果である。

古往來の研究については、従来二三氏の之を試みたものがあるけれども、それ等は部分的のものであり、またその内容についての研究は未だ精密ならざるものが多い。それ等に比べて、本書は其量に於ても質に於ても大に勝るものあり、まさに劃期的のものといはざるを得ない。殊に古往來を綜合的に見渡して、その動きの中に初等教育の姿を見出そうとする研究は、従来未だ之を試みたものは無く、その識見とその労とを多とすると共に、その業績が学界に貢獻することの大なるものあるを認めなければならぬ。